建築大辞典

建築大辞典

彰国社

建築大辞典〈縮刷版〉 **定価 8,500円**

昭和51年3月20日 第1版 発行
昭和51年5月20日 第1版 第2刷
昭和52年6月20日 第1版 第3刷
昭和53年9月10日 第1版 第4刷
昭和54年9月10日 第1版 第5刷
昭和56年2月10日 第1版 第6刷
昭和57年6月20日 第1版 第7刷

不許
複製

編集・発行者 ©下出源七
発行所 株式会社 彰国社
160 東京都新宿区坂町25
電話 359-3231(大代表)
振替口座 東京 6-173401

自然科学書協会会員
工学書協会会員

3552-636002-3081
Printed in Japan

目　次

序

編集言

編集委員名・執筆者名

凡　例

用字・用語の原則

分野別記号一覧

語　彙

英和対照語彙

付　録

付　図

難読語集

年号対照表

度量衡単位一覧

序

本邦において建築辞典上梓の嚆矢と目されますものは，故中村達太郎博士による「日本建築辞彙（1906刊）」であろうと思われます。当時，未だ揺籃期に在った我が国建築界において，氾濫する多種多様な建築のことばに的確な定義を与え，学問発展のために共通言語の整理を図られたその努力と功績とは，既に七十年を経た今日においても猶その輝きを失っておりません。

第二次世界大戦後，廃墟の国土再建から再出発した我が国建築界は，以後国交の回復に伴い諸外国からの尨大な情報の流入によって約十年の空白を埋めてなお余りある急激な発展を見るとともに，当然のことながらそこには全く新しい造形概念や技術，そして新材料等が次ぎ次ぎに誕生しました。すなわち第二の黎明期であったともいえましょう。

これらの強烈な刺激により，伝統的な日本建築を基盤とする我が国の建築のことばは急速に膨張し，複雑化し，遂には語義の混乱をすら招来するに至りました。

ことばは常に時代と共に流動・変化してゆくものでありますが，決定的な意味を持つべき学問を情報として形成することばの解釈は不動のものであらねばならぬ筈であります。しかし趨勢は覆うべくもなく，これが一時点を画して正確な共通言語を持つための再整理が強く要望される所以であり，本辞典刊行の意義もまたここに存在するのでもあります。

本辞典刊行の企画開始は，遠く昭和25年に遡ります。爾来二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

用字・用語の原則

建築のもつ広範な諸分野の，時間的かつ空間的な広がりを有する文化の総合性にかんがみ，本辞典においても，的確な，簡潔明快な文章表現に即して，文意の視覚的，直覚的な把握に資するよう意図した。

Ⅰ　当用漢字・同改定音訓表・現代かなづかいに準拠することを建前にはするが，特に漢字については，強いてこだわらない。

1.　専門用語で文の読解を助けるのに役立つと思われるもの。

〔例〕　梁　桁　瓦　束　棟　杭　枠　釘　扉　塀　溝　枘　隅　垣　鉋　鋸　鏝　庇
竪樋　水栓　踏面　塵埃　亀裂　遮蔽　剪断　剝離　釉薬　間隙　梯子　沓摺
歪み　撓み　捩り　吊り　叩き　斫り　葺き　決り　迫(せ)り　注(っ)ぎ　など

2.　頻度が多く，従来長く慣用されていると認められるもの。

〔例〕　孔(あな)　泡　渦　桟　煤　棚　屑　靴　殻　脇　紋　籠　爪　尻　肌　洞　肘
凹凸　挿入　扁平　勾配　下駄　柄杓　風呂　僅少　螺旋　個所　攪拌　凹む
嵌める　均(なら)す　繋ぐ　祀る　遣る　挑む　汲む　掻く　尖る　浚う　など

3.　俗語・職能方言などに類し，意味を表すのに適切なもの。

4.　古語・固有名詞の類で，当用漢字表にないもの。

5.　引用文献その他の原文を生かすために必要なもの。
ただし 4，5 項の漢字で当用漢字表に同義の文字が残るものについては，その字体を用いるものとする。

6.　見出し語に付する漢字のうち，本字・俗字など幾つかの字体を有するものについては，従来比較的に慣用されてきたと思われるものを優先し，当て字類もある程度用いることとした。

〔例〕　鋪→舗，鉤→鈎，朔→萌，捏→揑，裳階(もこし)，堅魚木(かつおぎ)，魚子垣(ななこがき)　など

7.　全体を通じ，難読語については可能な限りふりがなを付した。

Ⅱ　土木・建築・化学その他の分野における用語で，片仮名を用いる表記の示されているもの，その他特殊な表記法のあるものについては，建築用語や一般に用いられる表記を優先する場合もあり，必ずしもそれに依らない。法律・経済に関するものなど，通例化しているものはある程度これを準用した。

編　集　言

本辞典は，ひらがな，カタカナ50音引きによる建築用語の集大成を意図して編集されたもので，総収録語彙は約32,000語に及んでいる。

元来，建築用語とは，建築学を構成する学術用語，建築を造る用語，建築を使う用語，そして建築を記録する用語等を包括したものを言うが，本辞典においては，上記の狭義の建築用語に加え，建築に関連ある用語，建築と他とを結ぶ用語，すなわち建築が接点を持つ近隣分野である都市工学・造園・インテリア・デザイン・工芸・人間工学・建築経済・防災工学・数学等の用語も積極的に収録してある。さらに，在来の辞典に共通して欠落している人名・文献名・建物名・都市名・団体名，会議名，特に歴史関係においては，建築儀礼・民家・和船等の用語をも広く収録した。

これは，日進月歩の建築分野において，将来当然起るべき学問の輪の拡大ないしは他との融合の予測と，現時点で記録しておかないと消滅する虞れのある古語の収録とを意味している。

この意味から本辞典は建築大辞典と銘打ってはいるが，もう少しスケールが拡大された「環境デザイン辞典」ともいうべき機能を持っていると言えよう。

本辞典は，その性格を各分野の専門家が各自の専門分野について使用するためのものではなくして，関連ある周辺分野の用語を抽出し，それを理解するためのものとすることに徹した。言い換えれば，建築諸分野にある共通の情報をできるだけ広く正確に収めることである。従って，この方式に則ると，ややともすれば語彙が無限に増加する危険性があるので，本辞典では，極端な各専門用語ならびに一般的な国語辞典に収録されていて，しかも格別の意味を持たない間接的な用語および解説はすべて省いてある。

各語に付された解説は，単なる言葉の定義を超え，意識的にやや事典に近い記述方式を採っており，加えて必要な語にはでき得る限り図版を付し，視覚的な理解を併せて重視するとともに，本文中に収録し得ない大きさを持つ総合図については，付図として巻末にこれをまとめてある。

具体的な編集方法については，編集委員の合議による決定を進行の軸として，まず基本語彙を選出し，これを基に各専門分野の語彙の全体に対するバランスを勘案

十有余年，その間幾度か執筆直前の段階にまで到達しながら，変転極まりない社会情勢ないしは諸条件の不備により振り出しに戻って再検討を行わざるを得ない状況に遭遇し，最終的に編集開始に踏切ったのは，実に昭和42年の春であります。

幸い編集委員各位の卓越せる能力と情熱とに加え，百数十名に垂々とする各専門分野第一線の学者・技術者の方々から成る執筆陣の積極的なご協力を得て，漸くここに私の生涯の念願が結実するのを見ることができましたことは洵に喜ばしく，まさに建築辞典の決定版として比類なきものをつくり得たと，満腔の自信を持って斯界におくるものであります。ややもすれば閉鎖的であった日本の建築学の分野にも，近年俄かに他分野との接近・交流が始まり，近い将来において建築学は学際領域を包括しながらますます発展拡大され，更に多様化の度合を増すものと思われます。これらの予測に加えて出版の常道からしても，本辞典の刊行によってことばの整理の終了を意味するものではなく，まさに開始されたというべきでありましょう。

今後，広く江湖の諸賢のご教示を仰ぎ，時宜に応じて補遺あるいは改訂を行ってゆくことにより無限の生命を保持させ，常に斯界の読者の好伴侶たり得ますよう社を挙げて育ててゆく決意であります。

ここに生み出せる者の責任の重さを痛感しつつ，改めて編集委員各位並びに執筆者各位の永年のご労苦に対し，深甚なる感謝と敬意とを表します。

昭和49年6月1日　創立記念日に方り

彰国社社主　下　出　源　七

凡　例

本辞典では，記述順序の原則を下記の２種とした。

1.　日本語の場合

見出し語（ひらがな）——漢字——分野記号——外国語——解説

2.　外国語・外来語の場合

見出し語（カタカナ）——分野記号——解説（I-4 参照）

但し，同義異語あるいは同語異音のものについては記述の重複を避けるため，上記の原則にもかかわらず省略型を用いた。（例）

仮枠(かり)→かたわく（型枠）
前庭(まえ)→ぜんてい（前庭）

I　見出し語

1.　現代かなづかいで表記した。日本語はひらがなで示した。

2.　外国語・外来語は本辞典の「用字・用語の原則」(xiii ページ) に従ってカタカナで示した。但し，旧来慣用され，その発音が定着しているものについては，そのまま採用した。（例）

ヴォールト　vault
バルブ　valve

3.　外国人名はファミリーネームによった。例外として個人でない場合がある。（例）

ガルニエ　Garnier, Tony
アーザム兄弟

4.　外国語・外来語の見出し語が略称の場合は，カタカナの次にローマ字による略名を置いた。（例）

アイ アイ ティー　IIT

5.　見出し語の漢字は当用漢字にこだわらず用いた。隠語・符牒あるいは明らかに無意味な当て字と思われるものについては除外した。

6.　一つの見出し語に幾通りもの漢字がある場合は，その使用度の高いものから順次列記した。解説中の使用漢字は原則として第一順位のものを使用した。（例）

かわら　航，瓦，甎

7.　朝鮮語・中国語は日本で一般に使用されている漢字を当てた。（例）

イポ　耳包
ハンタン　邯鄲

8.　アイヌ語はカタカナで示した。

しながら調整を行ったのち，各分野ごとに担当委員と執筆者とにより必要語の追加も含めて収録語彙の決定および記述の調整を行った。以後，完成に至るまで数次に亘る全体的な内容のチェックおよび図版の選択等については，編集委員と彰国社編集部との間において綿密な協力のもとに行われた。

また，本辞典は決定した収録語彙に付された各執筆者の記述をそのままの形で記載してゆく方式は採らず，あらかじめ定められた凡例に則り，読みやすさを前提とした一定の記述パターンに統一するとともに，解説の不必要な重複を避け，なおかつ各語間の関連性を示すため種々の記号を用いて，全体的に有機性を持たせてある。そのため，一部の語の記述については他語との合成ないしは記号に代用するための削除・省略等を行った。これは，本辞典の編集方針による宿命とも言うべき不可欠の作業であり，ここに改めて執筆者各位に対しご諒承を求めるとともに，その過程において不備な面が生じたとすれば，それは一に編集者の責任であることを明らかにしておきたい。

なお，各語には，分野記号を付けるとともに，相当語・原語のあるものに限り英語を付け，他国の語は国籍を略記してその国語を付けてある。巻末にはアルファベット順による英和対照語彙（他国語も含む）がまとめられてあり，この分野記号によってその語の性格が明確に把握できるはずである。この英語を主体とした外国語の正確さについては，企画当初からの大きな課題であったが，幸い星野和弘・木村昌夫両氏のご協力により精度の高いチェックがなされたと確信している。このための使用文献名は英和対照語彙の巻末に列記した。

また，編集委員の方はもとより，執筆者として参加され，なおかつ語の選択および調整等に亘って編集委員に準ずるご協力を頂いた益田重華・長倉康彦・船越徹・岩下秀男・久保敏行・山岡義典の諸氏に，さらに図版の統一ないしは自ら描いてくださった井口洋佑・大熊喜光の両氏に対し，併せて深甚なる感謝の意を表したい。

編集者記

編集委員名
（50音順）

法政大学教授　工学博士　青木　繁

美術評論家　阿部公正

工学院大学学長　工学博士　伊藤鄭爾

法政大学教授・建築設備設計研究所所長　犬塚恵三

東京大学教授　工学博士　内田祥哉

東京大学教授　工学博士　岸谷孝一

福井大学教授　工学博士　城谷　豊

都市環境研究所所長　土田　旭

ブラジル戸田建設株式会社社長　平沢克彦

執筆者名
（50音順）

相川新一　伊藤鄭爾　岡本嘉行

青木　繁　稲葉和也　小滝一正

青山　幹　犬塚恵三　加賀秀治

阿部公正　今泉勝吉　嵩　英雄

荒木睦彦　岩下秀男　片桐嗣穂

安藤幸喜　岩田秀行　蒲池紀生

安蒜忠夫　上田義之　川口　衞

飯沼秀晴　碓井憲一　岸谷孝一

井口洋佑　内田雄造　北村　弘

石井謙治　内田祥哉　城戸義雄

石橋利彦　大熊喜光　木村　衛

磯辺行久　大熊　孝　久保敏行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小池迪夫
小泉嘉四郎
越部　毅
後藤一雄
後藤哲雄
小林重順
小原二郎
近藤準子
近藤基樹
斎藤辰彦
佐々木健夫
佐藤邦夫
仕入豊和
塩田敏志
重倉祐光
島田良一
城谷　豊
菅原進一
鈴木俊夫
鈴木　勝
瀬川秀吉
関根　孝
副島啓治
高瀬忠重
高橋修一
高橋敏雄
高見　元
竹本克彦
竹本　宦
田中　豊

多羅尾建治
土田　旭
鶴井哲夫
鶴田　裕
寺田秀夫
土岐高史
友沢史紀
直井英雄
長倉康彦
名須川良平
南条道昌
野間道生
橋本恵市
原　　坦
平沢克彦
深浦栄助
福沢宗道
藤井正一郎
藤上輝之
船越　徹
舟橋功男
前谷満歳
前野淳一郎
牧野　稔
益田重華
松浦邦男
松下冨士雄
松島道也
松本啓俊
丸一俊雄

三浦　寛
水口俊典
道江義頼
三村由夫
三宅　醇
宮谷重雄
宮村　忠
虫明功臣
村上處直
森戸　哲
森本正昭
森谷俊夫
八木沢壮一
矢吹茂郎
山岡義典
山門明雄
山川　仁
山口　広
山田亮一
山原　浩
山室真二
油井範善
横山　明
横山　正
吉沢久男
吉野洋一
若林時郎
渡辺昭彦
渡辺敬三
渡辺　力

II 語の配列

1. 50音順
2. ひらがな，カタカナの順
3. 拗音・促音は直音の後，濁音・半濁音はその順に清音の後に置いた。(例)

しよう　しょう
ハブ　バフ　パブ

4. 長音は除外して考え，直音の後に置いた。(例)

フリーウェイ
フーリエすう
フリーエリア

5. 同音の見出し語が並ぶときは，漢字の画数の少ない語を先に置いた。(例)

あし　足
あし　葦

III 外国語

1. 外国語・外来語の翻訳語，原語，相当する英語，定訳のある英語のみを付し，原則として解説のある語に置き，解説のない語については省いた。但し，見出し語がカタカナの場合に限り重複して付けた。(例)

いっぽんクレーン→
ジンポールデリック
gin pole derrick
ガスファーネス gas furnace
→おんきろ

2. 原則として外国語は英語とした。特に英語と米語に著しく違いのあるものについては区別をつけた。(例)

高速道路〔英〕motorway
〔米〕expressway

3. 英語以外の外国語は国籍名を入れ，原語で記した。(V-〔　〕(i) 参照)(例)

ファサード〔仏〕façade

4. ギリシア語・ロシア語・アラビア語・サンスクリットについてはローマ字に置換えて付けた。(例)

ストゥーパ〔梵〕stūp

5. 造園用語としての植物名でラテン学名のあるものには〔拉〕に † 印を付けた。(例)

〔拉†〕Thuia Oriental

IV 解説

1. 「用字・用語の原則」に従い記述し，漢字は当用漢字にこだわらず用いた。
2. 複数の意味を持つ語については①……②……と分けて解説した。
3. 同義異語は一般に使われている語に解説を置き，他方は見出し語のみとして解説のある語へ返した。(例)

袖瓦(そでがわら)→けらばがわら
(螻羽瓦)

4. 文献には発行年と出典，建物には竣工年，JIS・JAS等には番号，人名には生没年を付けた。(V 参照)
5. 関連のある語を中項目で解説し，個々の語については見出し語のみとして解説のある項目へ返したものもある。(例)

えぞやまざくら→さくらるい
おおしまざくら→さくらるい
ひがんざくら→さくらるい

V 記号

□		分野記号。xv ページに掲げた分類表により付けた。複数の分野の意味を持つときは，それぞれの分野の記号を併置した。(例)	ば 場 他都計
〔 〕	(i)	外国語の国籍を示す。 〔英〕 イギリス　〔米〕 アメリカ 〔仏〕 フランス　〔独〕 ドイツ 〔拉〕 ラテン　〔希〕 ギリシア 〔西〕 スペイン　〔露〕 ロシア 〔亜〕 アラビア　〔梵〕 サンスクリット	
	(ii)	人名における生没年(例)	Saarinen, Eero 〔1910~61〕
→	(i)	先行語の解説を見よ(例)	ID→インダストリアルデザイン
	(ii)	先行語の図を見よ(例)	瓦棧→ (図) ひっかけさんがわら
⇗		解説を他の語と関連して詳しく理解するためにその語を見よ(例)	リブアーチ⇗トラスアーチ
*		解説のよりよい理解を求めるならば，この語は見出し語として存在しているから参照せよ。(語の右肩に付く)	
†		植物のラテン学名を示す(〔拉〕の右肩に付く)(例)	〔拉†〕 Salix sp.
↔		反義語もしくは一対の意味を持つ語(例)	出隅↔入隅　静的加力↔動的加力
『 』		書名・雑誌名・論文(例)	『匠明』 『Modern Architecture (1929)』
「 」	(i)	解説中の引用文・宣言など(例)	タウトの「色彩宣言」
	(ii)	見出し語の略称(例)	無双窓　略して「無双」ともいう
	(iii)	見出し語の使用例(例)	間(あい)「垂木あい」などと用いる
	(iv)	見出し語の別称(例)	檔(あし)「陽疾」ともいう
( )	(i)	難読語の読み方(例)	豕扠首(いのこさす)
	(ii)	その他の補足事項(例)	(JIS A 5207) 1830 (天保元) 年 古代エジプト (新王国以後)
:		解説文中の語の説明	
⌈		1行下の解説文の延長	
⌊		1行上の解説文の延長	

分野別記号一覧

史　日本史　西洋史　東洋史　古建築関係　建物名　史蹟　地名　建築儀礼　民家　和船　古職能　古語　規矩術

園　庭園名　植栽　観光施設　レクリエーション施設　造園

計　設計　計画　製図　建築部分　建築種別　建築空間　建具　家具　インテリア　モデュール　人間工学　建築用語

構　各種構造　特殊構造　構造計画　構造法　振動　耐震　土質　基礎　溶接　力学一般　構造試験

材　素材　加工材料　材料試験　接着剤　金物　瓦　化学製品

施　各種工事　施工法　仮設　現場用語　施工管理　建設機械　工具　測量　仕口

備　音　光　熱　空調　衛生　空気　設備機器　計測　給排水　気象　単位

経　建物経営　行政　生産経済　入札・請負・契約　建設業財務　積算　住宅問題　事業　宅地分類

都　都市計画　都市工学　都市名　地域地区　道路・交通　解析・調査　都市種別　都市デザイン　都市施設　都市衛生　都市防災

災　各分野にわたる防災

法　各分野にわたる法律

人　各分野にわたる人名

文　各分野にわたる文献

デ　基礎デザイン　心理　色彩　デザイン手法　絵画　宣伝

数　数学　コンピューター

他　風俗・習慣　文様　生花　茶道　仏具　武具　工芸品　マスメディア用語　儀式・行事　模様　符牒

注）団体名・会議名については各該当分野記号を付した。

Ⅲ 「改定送り仮名の付け方」に示された通則には準拠するが，その許容範囲は大幅に採り入れ，難読・誤読に陥らない程度に簡略化することとした。

1. 活用語から転じた感じの明らかな名詞および活用語を含む複合名詞においては，その送り仮名の一部または全部を省く場合もある。また，活用語およびその複合語についてもこれに準じた。

2. 慣用が固定していると認められる語は，用語を含めて，原則として送り仮名を省くこととした。

〔例〕 押縁　込栓　折釘　骨組　組立　仕上　見積　引綱　畳敷　入母屋　指鴨居
請負　瓦葺　押入　伏図　衝立　植木　脚立　漆塗　間仕切　鎌倉彫　2階建
終る　変る　起る　当る　曲る　向い合う　落し込む　差押える　繰返す
抜取り　付替え　取付け　吐出し　引張り　溶込み　突固め　積卸し　折曲げ
組合せ　研出し　刈込み　練直し　吹抜け　洗出し　立上がり　立上り部　など

Ⅳ 外来語はなるべく国語審議会の「外来語表記の原則」を参考にしたが，原音の意識の残るものについての例外は，その限界・程度が分明でないため，独自の判断によることとした。ただし，固有名詞については現地音に近い表記を用いるように努めた。

Ⅴ アルファベットの読みは，次のように定めて利用上の統一を図ることとした。なお，直接の関連はないが，ギリシア文字の読みについても掲げたので，参考に資されたい。

アルファベット

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー	エッチ	アイ	ジェー	ケー	エル	エム
N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
エヌ	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー	ヴィー	ダブリュー	エックス	ワイ	ゼット

ギリシア文字

Α α	Β β, ϐ	Γ γ	Δ δ, ∂	Ε ε, ϵ	Ζ ζ	Η η	Θ θ, ϑ	Ι ι	Κ κ	Λ λ	Μ μ
アルファー	ベータ	ガンマ	デルタ	イプシロン (エ)	ゼータ	エータ (イ)	シータ	イオタ	カッパ	ラムダ	ミュー
Ν ν	Ξ ξ	Ο ο	Π π	Ρ ρ	Σ σ, ς	Τ τ	Υ υ	Φ φ, φ	Χ χ	Ψ ψ	Ω ω
ニュー	クサイ (クシ)	オミクロン	パイ	ロー	シグマ	タウ	ウプシロン (ユ)	ファイ (フィー)	カイ	プサイ (プシー)	オメガ

語　彙

あ 1	い 59	う 101	え 133	お 163
か 211	き 321	く 381	け 421	こ 463
さ 553	し 609	す 761	せ 803	そ 849
た 875	ち 949	つ 993	て 1017	と 1057
な 1121	に 1145	ぬ 1167	ね 1171	の 1187
は 1201	ひ 1267	ふ 1315	へ 1379	ほ 1403
ま 1445	み 1475	む 1495	め 1503	も 1515
や 1533	—	ゆ 1549	—	よ 1565
ら 1585	り 1595	る 1619	れ 1625	ろ 1637
わ 1653	—	—	—	—

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com